

2018年度 プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）

プロジェクト名	分野横断によるセルフアセスメントツールの開発研究
研 究 所 名	実践女子大学セルフアセスメントツール研究所 (所長 日本語コミュニケーション学科 大塚みさ 教授)
設 置 開 始	2018. 4. 1
設 置 終 了	2021. 3. 31

■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）

《前期》

- ・ セルフアセスメントの一方法としてのルーブリックについて理解を深めた。
- ・ 実施経験のある教員のリードのもと、有志教員によるルーブリック調査実施(事前、事後2回ずつ)を試みた。
- ・ 学期末までに集計・分析業者を選定し、8月末に前期実施分のデータ集計及び分析結果を各教員のもとに届けた。
- ・ 講演会を実施してルーブリック調査への知識と理解を深め、講師から多くの最新情報を得ることができた。
- ・ 研究員2名が spod(四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)フォーラムに参加し、ルーブリック作成方法、学修評価方法等についての知識と理解を深めるとともに、講師や参加者との交流を深めた。
- ・ spod フォーラムへの参加で構築したネットワークを生かして、ルーブリック導入先進機関である東京理科大学を訪問し、情報収集・情報交換を行った。

《後期》

- ・ 集計・分析業者との検討を重ね、ルーブリック調査票の統一フォーマット作成を始めとする効率的な調査実施方法を構築した。
- ・ すべての教員研究員が1科目以上の担当科目においてルーブリック自己評価(事前、事後)を導入した。
- ・ 研究員2名が ACEID(The Asian Conference on Education & International Development、アジア教育・国際発展会議)に参加し、セルフアセスメント研究の最新動向を知る機会を得るとともに、参加者との交流を行った。
- ・ 一年間の研究成果を報告書にまとめた。各自が実施したルーブリック調査票、分析・集計結果を掲載することにより、異分野間での評価観点との比較、評価基準(記述語)のあり方等を学びあう機会を得た。

■現在までの達成度

研究所設置申請時に「2018年度中に着手予定」とした計画についての進捗と達成度を以下にまとめる。

①最も有効なセルフアセスメントツールの選定と検証

セルフアセスメントツールに関する最新動向の調査研究と、研究員による試作と試験的導入によって行う。

(2018年4月着手、2019年3月到達予定)

→達成度自己評価 100%

・関連文献や研修、フォーラムへの参加を通して調査研究を行い、全教員研究員がルーブリック調査の試作と試験的導入を実施した。

②科目ルーブリックの開発と精度向上

専門分野および科目特性に適合したセルフアセスメントツールとしての科目ルーブリックの開発を行い、その精度を向上させる。教員の視点からの評価や成績評価、ならびにヒアリング調査により被験者(学生)との認識のずれをチューニングして、その精度が80%以上となるよう改良を加える。

(2018年4月着手、2021年3月到達予定)

→年度達成度自己評価 100%、全期間達成度自己評価 60%

・文系・理系および教職・図書館学課程それぞれの特性に適合した科目ルーブリックが開発された。前期の試行を元に各研究員が後期実施のルーブリックに改良を加えることができた。

(③は2019年度4月着手予定)

④ルーブリックの体裁や授業への導入方法、学生からのアクセシビリティの検討

評価観点、評価尺度、評価基準(記述語)の検討、導入方法を検討すると共に、いかにして学生達が振り返りを行い、PDCAサイクルに反映させられるかどうかを検討する。

(2018年9月着手、2021年3月到達予定)

→年度達成度自己評価 90%、全期間達成度自己評価 20%

・各教員研究員がルーブリックの体裁、導入方法を十分に検討した上で調査を実施することができた。「学生からのアクセシビリティ」(⑤とも関連)については、検討を始めたばかりである。

⑤携帯端末で操作できるルーブリックアプリを開発する。

④と並行して検討し、試作と改良を重ねる。

(2018年9月着手、2021年3月到達予定)

→年度達成度自己評価 10%、3年間 15%

・業者への相談を重ねて模索を続けたが、セキュリティ面並びにコスト面での困難が大きいことが明らかとなった。

⑥課題ルーブリックの開発と精度向上

アクティブラーニング活動やプロジェクト活動に適合したセルフアセスメントツールとしての課題ルーブリックの開発を行い、その精度を向上させる。ヒアリング調査により活動参加者の認識とのずれをチューニングし

て、その精度が 80%以上となるよう改良を加える。

(2018 年 9 月着手、2021 年 3 月到達予定)

→年度達成度自己評価 80%、3 年間 20%

・2つの課外活動(「目黒のさんま祭り国際化プロジェクト」「ホリデーカードエクステンジプロジェクト)」にルーブリック調査を導入し、その結果をもとに精度向上のための修正点を分析した。ヒアリング調査は今後実施予定である。

■次年度以降の研究(見込み)

科目ルーブリックの開発と精度向上(継続)

ルーブリック調査票の改良と調査の実施、結果の集計・分析を行う。

汎用ルーブリックの作成と改良

大学・短期大学部における共通教育科目「実践入門セミナー」の統一ルーブリックを試作し、複数の学科で導入する。

ルーブリックの体裁や授業への導入方法、学生からのアクセシビリティの検討

特に「学生からのアクセシビリティ」の検討を行う。

携帯端末で操作できるルーブリックアプリ開発の可能性追究

実現可能性が低いと判断された場合は、次善策を探る。

課題ルーブリックの開発と精度向上

導入する活動を増やし、ヒアリングを重ねて精度向上を目指す。

学会等における研究成果の発表と、国内外でのネットワーク構築

教育系の学会、各研究員所属の専門分野における学会等での発表を行い、有益な意見を得る。また先進機関とのネットワーク構築を進め、情報収集を行う。

■研究活動における成果

(1) 研究成果(雑誌、学会発表、図書等)

・研究所設置初年次の 2018 年度は、研究所内での学び合いと意見交換に重点を置いた。年度末には各研究員が実施したルーブリック調査票と集計・分析結果(データ)、および各研究員による分析結果を報告書にまとめることができた。

(2) 学生・生徒の教育及び支援に関する還元

・事前・事後に実施するルーブリック調査が学生の振り返りの機会となった。

・慎重の低い評価観点から、教員が授業内容改善のヒントを得ることができた。

・ルーブリック調査票自由記述欄を活用することで、「事後」に評価尺度を向上させるために学生一人ひとりが具体的に取り組むべきことを認識させることができた。

・評価観点に全学ディプロマポリシー(DP)を盛り込むことにより、カリキュラムマトリクスならびにシラバスで提示する「履修を通して身につく態度・能力」を数値をもって検証することができた。これは、担当教員に

とって有益であることはもとより、学生にとっても学びの成果の積み重ねを確認する好機であるといえる。また、2019年度より導入された J-TAS システムにおける DP 到達度(自己診断ルーブリック)を考えるヒントになると考えられる。「協働力」はその分かりやすい一例であり、授業におけるグループワークの効果や各学生の参加姿勢が如実に表れていた。

・5段階の最上位「レベル 5」を「期待する以上」と定義することにより、学生が現状に満足することなくさらに向上心を持つことを促すことができた。思うように伸びなかった場合も、次のレベルの記述内容を参照して主体的な取り組みを行うヒントを得ることができたと思われる。・課題ルーブリックの導入によってプロジェクト参加者が事前に到達目標を設定し、振り返りを行う PDCA サイクルを確立することができた。特に活動を細分化した評価観点の設定が効果的であることが検証された。